幼児期前期における嫌いな食べ物の質的变化に関する縦断研究

會退 友美*¹, 赤松 利恵*¹, 杉本 尚子*²

*¹お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 *²静岡県伊東市役所健康福祉部高齢者福祉課

【目的】 幼児期前期の子どもの嫌いな食べ物は、1歳6ヶ月児から3歳児にかけて変化するかを既存の縦断的データを用いて質的に検討する。

【方法】 静岡県伊東市保健センターにおいて、平成12年度から15年度に出生した子どもを対象に実施した、10ヶ月児、1歳6ヶ月児、3歳児健康診査の全てを受診した1,313人分の問診票データを利用した。項目は、10ヶ月児の属性、1歳6ヶ月児と3歳児の属性および好き嫌いの有無、各年齢における嫌いな食べ物（自由記述）を用いた。また、1歳6ヶ月児と3歳児の両方で好き嫌いがあった者（以下、あり→あり）の内、嫌いな食べ物の内容を抽出して変化の内容を分類した。

【結果】 1歳6ヶ月児と3歳児における好き嫌いの有無から4群を作成した結果、“あり→あり”456人（38.7%），“あり→なし”150人（12.7%），“なし→あり”233人（19.8%），“なし→なし”339人（28.8%）であった。“あり→あり”のうち、両年齢で嫌いな食べ物が継続しているかを調べたところ、“嫌いな食べ物継続”91人（7.7%）、嫌いな食べ物が継続しなかった“嫌いな食べ物変化”は154人（13.0%），“判断不能の者”211人（17.9%）の3群に分けられた。

【結論】 1歳6ヶ月児と3歳児の両年齢で好き嫌いがあると回答している場合でも、その約半数は嫌いな食べ物に変化しており、その嫌いな食べ物の変化は多様であった。

栄養学雑誌, Vol.71 No.6 323-329 (2013)

キーワード: 幼児, 嫌いな食べ物, 縦断研究, 内容分析

I. 緒 言

近年、子どもの偏食を心配する母親が増加している^{1,2)}。子どもの偏食に関する研究は、これまで国内外において数多く行われているが、偏食の明確な定義はない。偏食は、好き嫌いとして表現されることもあり、実際に乳幼児栄養調査¹⁾では偏食、幼児健康度調査²⁾では好き嫌いが用いられており、この2つの言葉は同義語として用いられることが多い。

白木ら³⁾は、偏食を「特定の食品を嫌って避けたり、反対に特定の食品を好んでそれをよく食べるような食品の取り方」と定義している。しかしながら、多くの研究者は偏食の中でも、嫌って食べないことを課題としている。たとえば、村田ら⁴⁾は、子どもの偏食の有無と好きな食べ物、嫌いな食べ物との関連を調べた結果、好きな食べ物の有無と偏食の有無に関連はみられなかったが、嫌いな食べ物の有無と偏食には関連がみられたと報告している。また、曾根⁵⁾は、子どもの偏食について母親にたずねた調査を行い、母親の多くは「嫌って食べない」ことを偏食ととらえていたと考察している。このことから、子どもの偏食または好き嫌いの課題には、子どもが嫌いな食べ物に焦点を当てて検討することが求められている。

母親が子どもの好き嫌いを心配する理由には、これまでの研究で、好き嫌いによって子どもの食事内容が悪くなることや、子どもの頃の好き嫌いがその後も継続すると報告されていることがあげられる。たとえば、好き嫌いの継続に関連する研究では、2～3歳児の嗜好は8歳の嗜好に影響しているといわれており、低年齢児からの嗜好が重要であるとされている⁶⁾。また、Duboisら⁷⁾は、2～4歳の3年間のうち、3回とも好き嫌いがあると回答した者、1～2回好き嫌いがあると回答した者、1回も好き嫌いがなかった者の4歳児における食品摂取を検討した結果、3回とも好き嫌いがあると回答した者は、果物、野菜摂取が少なく、肉類の摂取も少なかったことを示した。その他、2～11歳の子どもの好き嫌いを調べた報告では、2年以上好き嫌いが続いた者は、改善した者に比べて、好みが強く、新しい食べ物を受け入れないことが示された⁸⁾。また、好き嫌いが継続する子の母親の多くは、食事中の子どもとの関係が悪いことを報告している⁵⁾。さらに、好き嫌いがある子どもは、母親に強制的に食べさせられたという悪い記憶を有していたとの報告もある⁹⁾。これらのことから、母親は、子どもの好き嫌いがその後も継続して食生活に影響を与えると心配するあまり、子どもに強制的に食べさせ、さらに子どもの好き嫌いを導くという悪循環に陥りやすいといえる。

連絡先: 赤松利恵 〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1 お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科
電話 03-5978-5680 FAX 03-5978-5680 E-mail akamatsu.rie@ocha.ac.jp

しかし、これらの研究は、好き嫌いの有無によって継続性を検討しており、実際に嫌いな食べ物が継続するかを検討していない。つまり、嫌いな食べ物の継続性を調べていない。幼児期の好き嫌いの有無のみでとらえるのではなく、食べ物の内容まで調べることにより、幼児期の好き嫌いは流動的であるかを検討できる。そこで、本研究の目的は、幼児期前期の好き嫌いの変化について、嫌いな食べ物の継続性、特に野菜に焦点をあて、縦断的既存データを用いて質的な検討を行うこととした。

Ⅱ. 方 法

1. 調 査 概 要

本研究の対象地域は、静岡県伊東市である。伊東市は、面積124.13平方キロメートル、伊豆半島の最東部に位置している。本研究の調査期間（平成12年～15年）の人口は、約7万5千人であった。豊富な温泉と自然環境に恵まれ、市民の8割が観光を中心とした第三次産業に従事している。首都圏からの中高年者の移住者もあり、急速に少子高齢化が進んでいる。

本研究では、平成12年度から15年度に出生した2,323人の児を対象とした。静岡県伊東市保健センターが用いている、10ヶ月児、1歳6ヶ月児と3歳児健康診査の間診票が揃う1,313人分（56.5%）について先行研究¹⁰⁾で収集したデータを用いて2次解析を行った。間診票は、主に家庭で育児に携わる者が記入するように作成され、健康診査1ヶ月前のお知らせとともに対象者の家庭に郵送された。回答済みの間診票を健康診査当日に持参してもらい、問診で活用されている。本研究では、10ヶ月児の間診票から属性、1歳6ヶ月児、3歳児からは属性および好き嫌いの項目を用いた。

なお、本研究は、伊東市情報公開条例に従って手続きを行い、決定通知書を受けた後、氏名、住所、電話番号、医療機関名を削除した間診票を使用した。また、本研究は、お茶の水女子大学生物医学的研究の倫理特別委員会の承認を得ている。

2. 調 査 項 目

1) 好き嫌い

好き嫌いについては、1歳6ヶ月児と3歳児でたずねており、教示は、“好き嫌いはありますか”であった。回答は、“ない”、“ある”、“激しい”の3段階であった。また、特に好きな食べ物と特に嫌いな食べ物をそれぞれ回答する自由記述の欄があり、本研究では、特に嫌いな食べ物の項目を用いた。

2) 属性

子どもの属性については、10ヶ月児の間診票から性別、出生順位、1歳6ヶ月児、3歳児からきょうだいの数を用いた。子どもの体格は、1歳6ヶ月児と3歳児の間診票から得られた身長と体重の結果を用いて肥満度を算出して評価した。肥満度＝（実測体重[kg]－標準体重[kg]）／標準体重[kg]を用いた。標準体重は、平成12年乳幼児身体発育調査報告書¹¹⁾に記載された式を用いて算出した。

$$\text{男児：} Y = 2.06 \times 10^{-3} X^2 - 0.1166X + 6.527,$$

$$\text{女児：} Y = 2.49 \times 10^{-3} X^2 - 0.1858X + 9.0360$$

（Y＝標準体重[kg]，X＝身長[cm]）。

肥満度は、－15%以下を「やせ」、－15%～15%未満を「標準」、15%以上を「肥満」とし、3群に分類した¹²⁾。

家族の属性に関する項目は、1歳6ヶ月児と3歳児の間診票から母親、父親の年齢、祖父母の同居の有無、母親の就業の有無を用いた。

3. 解 析 方 法

まず、各項目の記述統計を求めて分布を確認した。次に、McNemar検定を用いて1歳6ヶ月児と3歳児の好き嫌いの変化を調べた。続いて、横断的にそれぞれの年齢で子どもと保護者の属性と好き嫌いに関連があるかを検討し、さらに χ^2 検定、 t 検定を用いて1歳6ヶ月児の属性と3歳児の好き嫌いの有無について調べた。また、1歳6ヶ月児の好き嫌いが肥満度の変化に関連があるかを調べるため、1歳6ヶ月児の好き嫌いの有無を独立変数とし、1歳6ヶ月児から3歳児までの肥満度の変化量について、 t 検定を用いて比較した。

その後、1歳6ヶ月児と3歳児の嫌いな食べ物の内容（自由記述）について1名の研究者が同じような回答をまとめてカテゴリ化し、さらに別の研究者1名が内容を確認した。まず、“1歳6ヶ月児好き嫌いあり→3歳児好き嫌いあり”の内、1歳6ヶ月児と3歳児の嫌いな食べ物の内容を検討し、嫌いな食べ物が継続しなかった者の記述内容を調べた（例：「豆腐」→「トマト、牛乳」の豆腐を継続しなかった食べ物としてカウント）。本研究では、子どもの嫌いな食べ物としてあげられる野菜に焦点をあて、3歳児における嫌いな食べ物が野菜か野菜以外かに分類し、1歳6ヶ月児からの変化を分析した。さらに、嫌いな食べ物の個数の変化と食べ物の内容の変化を調べた（例：「豆腐」→「ピーマン」の場合、1個→1個で野菜以外→野菜）。次に、両年齢ともに好き嫌いがあり、同一の嫌いな食べ物を回答した者の継続した嫌いな食べ物を述べ人数で調べた。その際、嫌いな食べ物が複数あり、

その一部が継続した場合も、継続した食べ物をカウントした（例：「豆腐、刺身」→「豆腐、グリーンピース」の場合、豆腐を継続した食べ物としてカウント）。

以上の解析は、全て SPSS 19.0 ver for Windows（日本アイ・ビー・エム株式会社）を使用し、有意水準は 5 % とした（両側検定）。

Ⅲ. 結 果

1. 属 性

3 歳児健康診査時における母親の平均年齢（標準偏差）は、32.2（4.5）歳であり、父親の年齢は 34.5（5.6）歳であった。子どもの性別は男児 664 人（50.6%）、女児 648 人（49.4%）であり、49.0% が第 1 子であった。祖父母と同居する家庭は 1 歳 6 ヶ月児と 3 歳児とも約 3 割であった。また、就業がある母親は、1 歳 6 ヶ月児と 3 歳児でそれぞれ約 3 割と約 4 割であった（表 1）。

2. 1 歳 6 ヶ月児と 3 歳児における好き嫌いの有無と属性との関連

1 歳 6 ヶ月児の好き嫌いの状態は、“ない” が 617 人（48.2%），“ある” が 625 人（48.9%），“激しい” が 38 人（3.0%）であった。3 歳児では、“ない” が 496 人（41.2%），“ある” が 674 人（55.9%），“激しい” が 35 人（2.9%）であった。以降の分析では、好き嫌いが“ある”または“激しい”と回答した者を“好き嫌いあり”（1 歳 6 ヶ月児 663 人（51.8%）、3 歳児 709 人（58.8%））とし、“ない”と回答した者を“好き嫌いなし”として 2 群に分類した。

続いて、子どもと保護者の属性と 1 歳 6 ヶ月児、3 歳児における好き嫌いの有無について横断的に関連を検討した。その結果、1 歳 6 ヶ月児では、好き嫌いがいない子の方が、好き嫌いがある子に比べて出生順位（平均値（標準偏差））が低かった（好き嫌いなし vs 好き嫌いあり：1.7（0.8）子 vs 1.6（0.7）子、 $p=0.049$ ）。また、祖父母との同居では、好き嫌いがいない子の方が祖父母と同居していた（好き嫌いなし vs 好き嫌いあり：35.2% vs 28.8%、 $p=0.016$ ）。一方、3 歳児では、好き嫌い属性に関連はみられなかった。

それぞれの年齢における肥満度の平均値（標準偏差）は、1 歳 6 ヶ月児 2.2（7.6）%、3 歳児 2.5（7.5）% であった。さらに、1 歳 6 ヶ月児における好き嫌いが 1 歳 6 ヶ月児から 3 歳児の肥満度の変化に関連するかを調べるため、1 歳 6 ヶ月児から 3 歳児の肥満度の変化量について、1 歳 6 ヶ月児の好き嫌いの有無で比較した結果（平均値（標準偏差））、有意な差はみられなかった（好き

表 1 対象者の属性

	人	%
子どもの性別		
女児	648	49.4
男児	664	50.6
出生順位（10 ヶ月児）		
第 1 子	643	49.0
第 2 子	501	38.2
第 3 子	139	10.6
第 4 子	25	1.9
第 5 子	5	0.4
きょうだい数（1 歳 6 ヶ月児）		
1 人	585	44.6
2 人	541	41.2
3 人	152	11.6
4 人	27	2.1
5 人	7	0.5
きょうだい数（3 歳児）		
1 人	372	28.4
2 人	690	52.8
3 人	205	15.7
4 人	33	2.5
5 人	8	0.6
子どもの肥満度（1 歳 6 ヶ月児）		
やせ	10	0.8
標準	1,238	94.5
肥満	62	4.7
子どもの肥満度（3 歳児）		
やせ	2	0.2
標準	1,231	94.3
肥満	72	5.5
祖父母との同居（1 歳 6 ヶ月児）		
している	418	31.9
していない	894	68.1
祖父母との同居（3 歳児）		
している	428	32.6
していない	883	67.4
母親の就業（1 歳 6 ヶ月児）		
働いている	384	32.3
働いていない	804	67.7
母親の就業（3 歳児）		
働いている	500	42.9
働いていない	665	57.1

欠損値は項目ごとに除外した。

嫌いなし vs 好き嫌いあり：0.4（4.9）% vs 0.2（4.9）%、 $p=0.441$ ）。つまり、1 歳 6 ヶ月児の子どもの好き嫌いの有無と 1 歳 6 ヶ月児から 3 歳の体格の変化には関連がみられなかった。

3. 1 歳 6 ヶ月児と 3 歳児における好き嫌いの変化

1 歳 6 ヶ月児と 3 歳児ともに好き嫌いの有無を回答した 1,178 名の好き嫌いの有無の変化を McNemar 検定によって検討した結果、有意に人数分布が変化したことが

示された ($p<0.01$)。それぞれの人数は、図1に示す通り、“1歳6ヶ月児好き嫌いなし→3歳児好き嫌いなし” 339人 (28.8%)，“1歳6ヶ月児好き嫌いあり→3歳児好き嫌いあり” 456人 (38.7%)，“1歳6ヶ月児好き嫌いあり→3歳児好き嫌いなし” 150人 (12.7%)，“1歳6ヶ月児好き嫌いなし→3歳児好き嫌いあり” 233人 (19.8%)であった。

“1歳6ヶ月児好き嫌いあり→3歳児好き嫌いあり”の456人は、両年齢ともに同じ嫌いな食べ物を記入した“嫌いな食べ物継続” 91人 (7.7%)，嫌いな食べ物が継続しなかった“嫌いな食べ物変化”は154人 (13.0%)，“判断不能の者” 211人 (17.9%)の3群に分けられた。判断不能の者とは、嫌いな食べ物の自由記述がない (125人)，またはトマトから野菜に変化するなどの判断がつかなかった者 (86人)を指す。

以上のことから、好き嫌いの有無または内容に変化がみられなかった者 (“好き嫌いなし→なし”，“好き嫌いあり→あり”)のうち嫌いな食べ物継続は430人 (36.5%)であった。一方、好き嫌いの有無または内容に変化がみられた者 (“好き嫌いあり→あり”)のうち嫌いな食べ物の内容が変化，“好き嫌いあり→なし”，“好き嫌いなし→あり”)は537人 (45.6%)であった。

3. 好き嫌いが継続した者の内、嫌いな食べ物に変化した者の記述内容の検討

“1歳6ヶ月児好き嫌いあり→3歳児好き嫌いあり” 456人の内、嫌いな食べ物に変化した154人の記述内容を調べた。1歳6ヶ月児で嫌いであった食べ物を抽出した結果、延べ183件が得られ、最も多かった変化した食べ物は野菜類の53件 (23.0%)であり、続いて肉類が25件 (13.7%)，いも類が14件 (7.7%)であった。その他、

ぼそぼそしたものなどの食感，酸っぱいものなどの味，色が濃いものなどの色に関する回答もみられた。さらに，回答者それぞれの変化内容を調べるため，「その時による」などを回答した者を除外した126人の回答した個数を数えた。その結果，1個→1個75人，1個→2個31人，2個→1個17人，2個→2個2人であった。嫌いな食べ物が1個ずつであった者の結果を表2に示す。表2の通り，嫌いな食べ物が1個の者の内容の変化では，野菜の種類が変わった者が20人と最も多く，続いて野菜から野菜以外の食べ物に変わった者が多かった (表2)。1個→2個へ変化した者 (31人)では，トマトが増えた者が最も多く (10人)，続いて野菜，ピーマンが各5人であった。2個→1個へ変化した者 (17人)では，野菜から別の野菜に変化した者はおらず，全く異なる食べ物に変化しており，野菜以外の物が嫌いであった者が野菜を嫌いになっていた (例：肉，魚→玉ねぎ)。2個→2個へ変化した2人の内容は，豆，いも→練り製品，野菜と肉，魚→ピーマン，ほうれん草であった。

4. 好き嫌いが継続した者の内、嫌いな食べ物が継続した者の記述内容の検討

次に，“1歳6ヶ月児好き嫌いあり→3歳児好き嫌いあり” 456人の内，嫌いな食べ物が継続したと回答した者は91人であった (延べ99件)。その91人が回答した内容を分類した結果，継続した嫌いな食べ物が1個であった者は85人，2個は5人，4個は1人であった。継続した嫌いな食べ物が1個であった者の内容を分類した結果，野菜22人 (25.9%)，ピーマン6人 (7.1%) トマト，葉野菜各5人 (5.9%) など，野菜が52人 (61.2%)と最も多かった。次いで，肉12人 (14.1%)が多くみられ，続いて，牛乳，くだものが各6人 (7.1%)であった (表3)。

図1 1歳6ヶ月児から3歳児への好き嫌いと嫌いな食べ物の変化†

† McNemar 検定 ($p<0.01$)

表2 嫌いな食べ物が変化した者の内容の組み合わせ

1歳6ヶ月児	3歳児	例	人	%
野菜	野菜	レタス→ピーマン	20	26.7
	野菜以外	トマト→あんこ	13	17.3
肉	野菜	肉→ピーマン	8	10.7
	野菜以外	肉→揚げもの	2	2.7
ごはん	野菜	白飯→トマト	2	2.7
	野菜以外	ご飯→きのこ類	4	5.3
くだもの	野菜	バナナ→はくさい	4	5.3
	野菜以外	すっぱい果物→納豆	1	1.3
卵	野菜	卵→なす	3	4.0
	野菜以外	卵→肉	2	2.7
いも	野菜	いも類→葉物	3	4.0
	野菜以外	ゆでたいも類→卵	1	1.3
牛乳	野菜	牛乳→トマト	3	4.0
魚	野菜	魚→野菜類	1	1.3
	野菜以外	刺身→納豆	1	1.3
納豆	野菜以外	納豆→じゃがいも	2	2.7
豆腐	野菜	豆腐→ピーマン	2	2.7
ケチャップ	野菜	ケチャップのついたもの→野菜	2	2.7
海藻	野菜	ひじき→生トマト	1	1.3

$n=75$, 嫌いな食べ物の変化が1個の者を分析対象とした。

表3 嫌いな食べ物が継続した者の食べ物の内容

	人	(%)
野菜†	52	(61.2)
肉	12	(14.1)
牛乳	6	(7.1)
くだもの	6	(7.1)
納豆	3	(3.5)
ごはん	1	(1.2)
魚	1	(1.2)
パン	1	(1.2)
豆腐	1	(1.2)
ケーキ	1	(1.2)
固いもの	1	(1.2)

$n=85$, 嫌いな食べ物が1個であった者を分析対象とした。

† 野菜22人 (25.9%), ピーマン6人 (7.1%), トマト5人 (5.9%), 葉野菜5人 (5.9%), 生野菜4人 (4.7%), ほうれん草2人 (2.4%), 緑の野菜2人 (2.4%), なす2人 (2.4%), ブロッコリー2人 (2.4%), にんじん1人 (1.2%), ねぎ1人 (1.2%)

2個継続した者の嫌いな食べ物は、トマトと肉が各2人であり、ピーマン、ほうれん草、納豆、卵、魚、米が各1人であった。4個継続した者の内容は、野菜、マヨネーズ、チーズ、ホワイトソースであった。

IV. 考 察

本研究は、幼児期前期における好き嫌いの状態について縦断的に検討した結果、両年齢で好き嫌いがみられたとしても、その約半数は嫌いな食べ物に変化しており、その内容の変化は多様であることを報告した。

本研究で嫌いな食べ物を縦断的に分析した結果、1歳6ヶ月児から3歳児において、必ずしも嫌いな食べ物が継続しているわけではないことが示された。幼児期前期の好き嫌いは精神的、身体的発達の変化によって急激に増加するため、この時期の子どもをもつ母親は、子どもの好き嫌いを心配する者が多い。Batsellら¹³⁾は、大学生を対象に子どもの頃に無理やり食べさせられた嫌な思い出を後ろ向きに調査した。その結果、参加者のうち76%が親や教師などから無理やり食べさせられる経験を有しており、そのうち、72%が現在もその食べ物を食べないと回答したことを報告した。このことから、子どもの好き嫌いを心配するあまり保護者が強制的に食べさせるような関わりは、その後の子どもの食嗜好や食行動に影響を与える可能性がある。本研究の結果を用い、現時点の嫌いな食べ物を気に掛け過ぎるのではなく、少し長い目で捉えるように促すことで、無理やり食べさせる行動に働きかけることができるだろう。

さらに本研究では、嫌いな食べ物の変化は、多様であることが示された。また、好き嫌いが継続した者の1歳

6ヶ月児と3歳児における嫌いな食べ物の変化を調べたところ、約半数の者で嫌いな食べ物に変化していた。また、嫌いな食べ物は野菜類が多くみられたが、その中でもレタスからピーマンなど野菜の種類が変わる者や野菜以外の他の食品との組み合わせもみられたことから、個人でそれぞれ嗜好が異なることが示唆された。つまり、幼児期前期の嗜好とその変化には多様性があるといえる。また、約2割の子どもにおいて、3歳児で新たに嫌いな食べ物が出現していた。これは、子どもが新しい食物に出会う、自己表現ができるなど、社会的、精神的発達の証しといえる。

本研究の限界点として、分析に用いたデータは、自己申告による自由記述であったことがあげられる。よって、両年齢で嫌いな食べ物を対応させる際の判断が難しい回答があった。また、“野菜→野菜”と回答した者を“嫌いな食べ物継続”と判断したが、野菜と回答した者の詳細な食品はわからない。本研究の限界点を考慮して結果を解釈する必要がある。しかしながら、自由記述であったことにより、選択肢を設けた調査では拾いあげることができない回答者が感じているままの回答が得られたことは本研究の強みである。

V. 結 論

本研究は、幼児期前期の子どもの好き嫌いが継続しても、その約半数の嫌いな食べ物は変化しており、その変化は多様であることをはじめて報告した。

謝 辞

本研究の遂行に際し、データ収集のご協力を賜りました静岡県伊東市保健福祉部健康増進課（現健康福祉部健康医療課）の職員の皆様に厚く御礼申し上げます。また、本論文執筆にあたり、ご助言をいただきましたお茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科教授藤原葉子先生、教授森光康次郎先生、お茶の水女子大学生生活環境教育研究センター SHOKUIKU 総合研究部門准教授石川朋子先生に心より御礼申し上げます。最後に、データの入力にご協力いただいた、お茶の水女子大学生生活科学部食物栄養科学科佐藤祥瑚さん、下須賀沙季さん、外山未來さん、吉田千夏さんに心より感謝いたします。

利益相反

利益相反に相当する事項はない。

文 献

- 1) 厚生労働省：平成17年度乳幼児栄養調査結果の概要，<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2006/06/h0629-1.html>，（2013年10月22日）
- 2) 日本小児保健協会：幼児健康度に関する継続的比較研究，http://plaza.umin.ac.jp/~jschild/book/pdf/2010_kenkochousa.pdf，（2013年10月22日）
- 3) 白木まさ子，大村雅美，丸井英二：幼児の偏食と生活環境との関連，民族衛生，**74**，279-289（2008）
- 4) 村田 務，林 薫，染谷麻子：幼児の偏食と保護者の対応に関する調査，白梅学園短期大学紀要，**39**，113-127（2003）
- 5) 曾根眞理枝：幼児の食事に関する母親の意識と対応—偏食の視点からの考察—，横浜女子短期大学紀要，**21**，85-100（2006）
- 6) Skinner, J.D., Carruth, B.R., Wendy, B., et al.: Children's food preferences: a longitudinal analysis, *J. Am. Diet. Assoc.*, **102**, 1638-1647（2002）
- 7) Dubois, L., Farmer, A.P., Girard, M., et al.: Preschool children's eating behaviours are related to dietary adequacy and body weight, *Eur. J. Clin. Nutr.*, **61**, 846-855（2007）
- 8) Mascola, A.J., Bryson, S.W., Agras, W.S.: Picky eating during childhood: a longitudinal study to age 11 years, *Eat. Behav.*, **11**, 253-257（2010）
- 9) Galloway, A.T., Fiorito, L., Lee, Y., et al.: Parental pressure, dietary patterns, and weight status among girls who are "picky eaters", *J. Am. Diet. Assoc.*, **105**, 541-548（2005）
- 10) 会退友美，秋山陽子，赤松利恵，他：離乳期の子どもの間食に関する縦断研究—離乳期の菓子類摂取と幼児期の間食—，栄養学雑誌，**68**，8-14（2010）
- 11) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局：平成12年乳幼児身体発育調査報告書，<http://www.mhlw.go.jp/houdou/0110/h1024-4.html>，（2013年10月22日）
- 12) 日本肥満学会編：小児の肥満症マニュアル，p. 120（2004）医歯薬出版，東京
- 13) Batsell, W.R. Jr, Brown, A.S., Ansfield, M.E., et al.: "You will eat all of that!": a retrospective analysis of forced consumption episodes, *Appetite*, **38**, 211-219（2002）

（受付：平成25年3月7日，受理：平成25年10月22日）

Longitudinal Study of Qualitative Changes in Disliked Foods in Early Childhood

Tomomi Ainuki^{*1}, Rie Akamatsu^{*1} and Naoko Sugimoto^{*2}

^{*1}Graduate School of Humanities and Sciences, Ochanomizu University

^{*2}Ito City, Health and Welfare Department, The Elderly Welfare Division

ABSTRACT

Objective: To examine changes in disliked foods in early childhood (from 18 to 36 months old) using longitudinal qualitative data.

Methods: Children ($n = 1,313$) born between April 2000 and March 2004 were enrolled in Ito City (Shizuoka, Japan). Data ($n = 1,313$) from the children's health checkups conducted at 10, 18 and 36 months of age at the Ito City health center were used for the analysis. We analyzed demographic data at 10, 18, and 36 months old, the existence or non-existence of food preferences and free descriptions of disliked foods at 18 and 36 months old. We extracted the content of disliked foods and classified the changes of the content at both age (existence → existence).

Results: Food-preference results at 18 and 36 months were classified into four groups: 456 (38.7%) as “existence → existence,” 150 (12.7%) as “existence → non-existence,” 233 (19.8%) as “non-existence → existence” and 399 (28.8%) as “non-existence → non-existence.” In the “existence → existence” group, who reported disliked food at both ages, these food dislikes remained. Members of the “existence → existence” group were classified into the following groups: 91 (7.7%) as “continuance,” 154 (13.0%) as “non-continuance,” 211 (17.9%) as “non-estimation.”

Conclusion: Nearly half of the participants who reported the existence of a food preference at 18 and 36 months years of age changed their disliked foods; many of them made multiple food-preference changes.

Jpn. J. Nutr. Diet., **71** (6) 323~329 (2013)

Key words: infant, disliked food, longitudinal study, content analysis